室内楽オーディション合格者による披露演奏会

第26回 室内楽コンサート

2023年 2月26日（日）

開場 13:30 開演 14:00

会場　洗足学園 前田ホール

主催　洗足学園音楽大学・大学院

新型コロナウィルス感染症の感染拡大を防ぐためのお願い

・マスク着用の徹底、こまめな手指消毒・手洗い・咳エチケットの励行にご協力ください。
・大声や対面での会話はお控えください。
・演奏者への声援はご遠慮いただき、拍手のみとしてください。
・休憩時、終演後はスタッフが扉を開けるまでお待ちいただき、空いているドアから混雑を避けて入退場してください。
・客席内やロビーでのご飲食はお控えください。
・出演者への面会はできません。出演者への花束・プレゼントもご遠慮ください。
・万一、集団感染の発生が明らかになった際は、保健所に入場者の情報を提供する場合がございます。

ごあいさつ

　本日は洗足学園音楽大学「室内楽オーディション合格者による披露演奏会第26回室内楽コンサート」において頂き心より御礼申し上げます。洗足学園音楽大学における《室内楽》の位置づけは、個人の演奏技術の構築の過程で複数人のアンサンブルによる、音楽における主張や会話を通して様々な楽器の歴史、形式を学び表現する重要な講座であります。
　バロック時代以前は《室内声楽様式》《室内楽様式》と呼ばれ一般庶民も音楽を楽しんでいましたが、バロック時代になると貴族の音楽として発展した宮廷楽師による《室内の音楽(カメラ＝室(へや)と表現されていた)》は高貴な音楽とされ、庶民が触れることはありませんでした。
ハイドン・モーツァルト・ベートーヴェンが構築した次の古典派の時代には弦楽四重奏を中心とした《室内楽》に移行し、ソナタ形式を確立し次第に庶民の芸術として広まりました。
　さらにピアノの発達とともに様々な楽器種の組み合わせが広がりを生み、ロマン派、印象派、そして現代 へと着実にその裾野を広げ今や音楽の中心といえる分野となりました。
本日選抜された《室内楽》グループはそれぞれに、日ごろの練習成果を発揮してくれることに期待し、御来場の皆様と共に最後まで、熱い演奏を楽しみたいと思います。
　将来の学生の楽壇への活躍を祈りつつ、皆様への御挨拶とさせていただきます。

洗足学園音楽大学・大学院教授
室内楽研究運営委員会委員長
渡部 亨

プログラム

第一部

打楽器五重奏

N.ドートリー／**サイレント・キャニオンズ**

Nathan Daughtrey (b.1975) // Silent Canyons

フルート四重奏

A.レイハ／**シンフォニコ Op.12**

Antonín Reicha (1770-1836) // Shinfonico Op.12

第1楽章 アレグロ　Aregro
第2楽章 アンダンテ　Andante
第3楽章 メヌエット　Menuet
第4楽章 フィナーレ　Finale

サクソフォーン四重奏

G.ラゴ／**シウダデス**

Guillermo Lago (b.1960) // Ciudades

1. コルドバ　Córdoba
2. サラエボ　Sarajevo
3. アディスアベバ　Addis Ababa
4. モンテビデオ　Montevideo
5. ケルン　Köln
6. 東京　Tokyo

～ 休憩 ～

第二部

トロンボーン四重奏

E.ボザ／トロンボーンの為の３つの小品

Eugene Bozza（1905-1991）// Trois pieces

第1曲 アレグロ　Allegro
第2曲 モデラート　Moderato
第3曲 アレグロ ヴィーヴォ　Allegro Vivo

木管五重奏

H.トマジ／世俗と神聖な5つの踊り

Henri Tomasi.（1901-71）// Cinq Danses Profanes et Sacrées

第1楽章 田舎の踊り　Danse agreste
第2楽章 世俗的な踊り　Danse profane
第3楽章 神聖な祈りの踊り　Danse sacrée
第4楽章 婚礼の踊り　Danse nuptiale
第5楽章 戦士の踊り　Danse guerrière

ピアノ四重奏

G.フォーレ／ピアノ四重奏曲 第１番 Op.15

Gabriel Fauré（1845-1924）// Piano Quartet No.1 Op.15

第1楽章 アレグロ モルト モデラート　Allegro molto moderato
第2楽章 スケルツォ：アレグロ ヴィーヴォ　Scherzo: Allegro vivo
第3楽章 アダージョ　Adagio
第4楽章 アレグロ モルト　Allegro molto

打楽器五重奏

栃下 紗奈(学４)

川﨑 友仁(学３)　　大塚 愛美(学４)

林 拓海(学４)　　渡辺 優生(学３)

N.ドートリー／サイレント・キャニオンズ

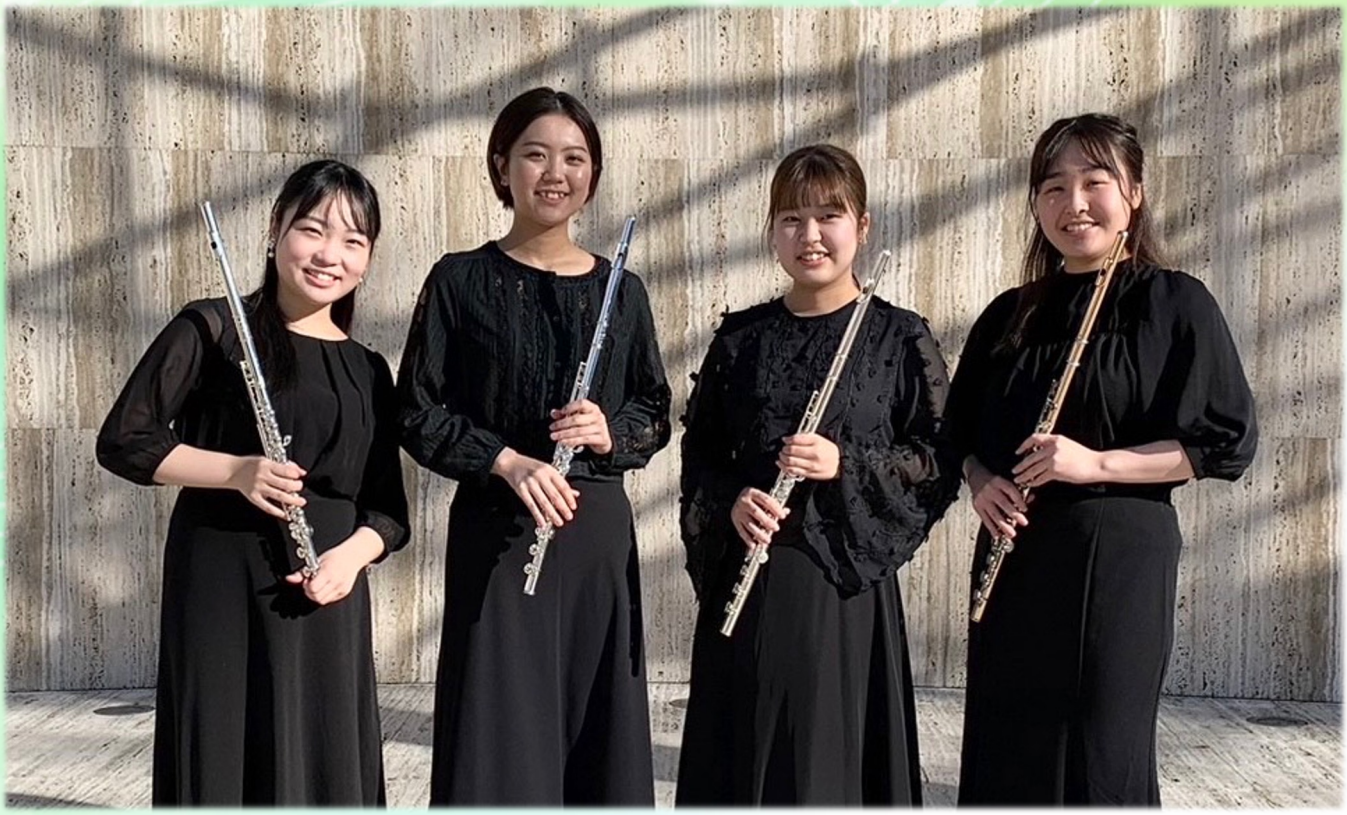
作曲家で鍵盤打楽器奏者であるネイサン・ドートリー（1975年～）は、ヤマハやサリアーズ・パーカッションなどの演奏家で指導者としてオーストラリア、アジア、東ヨーロッパ、そして北米全土で活動しながら、打楽器アンサンブルや吹奏楽、オーケストラなど多様なジャンルに数多くの作品を作曲している。マリンバ奏者としてはこれまでに、2枚のソロ・マリンバ・アルバム(「Spiral Passages」「The Yuletide Marimba」)をリリースし、作曲家としても2007年から毎年ASCAPプラス賞を受賞、さらに2014年に作曲のコンテストITEAハーヴィ・フィリップス賞で第一位に輝くなど高い評価を得ている。

《サイレント・キャニオンズ》は、フォート・ルイス大学の打楽器アンサンブルの委嘱をうけて2014年に作曲された。13世紀にアメリカ南西部のフォーコーナー地方（アメリカ西部のユタ州、コロラド州など4つの州の地域）で起きたアメリカ先住民プエブロ族の祖先であるアナサジ（ナバホ族の言葉で「古代の者」「古代の敵」を意味する）の消滅の物語から着想を得た作品。無人の洞窟に文明が築かれ、他民族との軋轢が生まれ、人々が消え、空虚な峡谷に戻っていく過程が音楽で表現される（以上作曲家自身の解説より）。

打楽器 4年　栃下 紗奈

曲目解説指導　那須田 務（講師）

フルート四重奏



鈴木 ぴあ乃(学２)　　岡田 理奈(学２)

下薗 采奈(学２)　　藤井 千尋(学２)

A.レイハ／ シンフォニコ Op.12

アントニーン・レイハ（1770年-1836年）はチェコ出身の作曲家であり、日本ではドイツ名であるアントン・ライヒャと呼ばれることが多い（レイハはチェコ語）、10歳の時に孤児となり、音楽家であった叔父ヨーゼフ・レイハに引き取られる。ヨーゼフからヴァイオリン、ピアノ、フルートを学び、ドイツの都市ボンにてフルート奏者として活動した。その際、《交響曲第5番「運命」》や《エリーゼのために》などでよく知られるベートーヴェンと出会う。その後パリやウィーン等を旅し、最終的にパリ音楽院では作曲科の教授を務め、作曲だけでなく、音楽理論家としても活躍した。教え子には、リストやベルリオーズ、グノーなどがいる。

本日演奏する《シンフォニコ》op12は成立状況やタイトル「シンフォニコ」の由来等については何もが分かっていない。現存する最も古い版はロンドンのモンザーニ＆ヒル社（1815年）だが、タイトルには「4つのフルートのためのカルテット」と記されているだけである。全部で4つの楽章からなる。第１楽章アレグロニ長調。冒頭に爽やかな主題があり、中盤に向け軽やかに展開していく。後半は懐かしさや温かみが感じられるフレーズから始まり、楽章を通して華やかな楽想が全４楽章の曲の始まりを告げる。第２楽章アンダンテト長調。牧歌的な楽章で、のどかな草原などを連想させる。第３楽章メヌエットト長調。中間部のトリオは3拍子から2拍子に変わる。冒頭は宮殿での踊りを想像させるが、トリオではフルートならではの細かく、軽やかなフレーズが続き、草原を駆け巡る風を想像させる。そして第４楽章フィナーレニ長調は、冒頭から最後まで細かく軽やかなフレーズが続き、華々しく曲の最後を飾る。

フルート 2年　藤井 千尋

曲目解説指導　那須田 務（講師）

サクソフォーン四重奏

伊藤 輝瞳(学４)　　矢澤 亘(学４)

重井 拓人(学４)　　兼田 柊子(学４)

G.ラゴ／ シウダデス

G.ラゴ（1960年～）はオランダのサクソフォニストであり作曲家。タイトルの「シウダデス」はスペイン語の「都市」の意味である。全6曲は楽章ではなく、彼にとって特別な意味を持つ6つの都市への音楽による描写であり、それぞれの楽曲は独立している。演奏順序を組み替えることも可能であるし、これから新たな曲が追加されることもあるだろうと作曲者は語っている。

〈コルドバ〉（スペイン）：ラゴが友人たちと学生時代に訪れたスペイン、アンダルシア州の街への描写であり、コルドバの聖マリア大聖堂「メズキータ」の景観を核心に持つ。異国情緒の中に神聖さ、厳かさが全面に感じられる。

〈サラエボ〉（ボスニア・ヘルツェゴビナ）：ラゴがサクソフォン奏者として文化的復興事業に携わり、サラエボ初のウインド・アンサンブルを設立する際に出会った友人達に捧げられている。1990年代に残酷な内戦に見舞われたこの街の様子を表現するかのような、静かで悲しげな旋律が、反復されるリズムの鼓動に乗って次第に大きく強くなっていく。

〈アディスアベバ〉（エチオピア）：タイトルはエチオピアの首都の名。ラゴとエチオピアの歌手ミンシェシュ（Minyeshu）との共演をきっかけとして生まれた曲。サクソフォンの特殊奏法であるスラップタンギングを多用した複雑なリズムが、土着的な音階を用いてエネルギッシュに描かれる。

〈モンテビデオ〉（ウルグアイ）：モンテビデオはウルグアイの首都。同国は南アメリカ南東部。ラプラタ川を挟んでアルゼンチン、北東にブラジル、南に大西洋に接している。タンゴが盛んで、アルゼンチンのブエノスアイレスタンゴと並んで、第2のタンゴ都市ともいわれる。湿度と重さのある旋律とハーモニーが、タンゴのスタイルに乗ってゆっくりと進むタンゴ・バラードである。

〈ケルン〉（ドイツ）：ラゴが8歳で訪れたケルンは、オランダ以外に旅した最初の都市であり、町の中心部と大聖堂、そして都市の中心を流れるライン川への印象が音楽で描かれている。J.S.バッハの《フーガの技法》の主題が引用されており、敬虔なハーモニーにどこか懐旧が漂う。

〈東京〉（日本）：東京は、「驚き」「エネルギー」「異国情緒」「喜びの歌」であるとラゴ自身が語る。東京の街の光や雑踏をリズムやハーモニーに落とし込んだ、まさしく絵画的な楽曲である。

サクソフォーン ４年　矢澤 亘

曲目解説指導　那須田 務（講師）

トロンボーン四重奏

Tb.鵜飼 輝(学２)　　Tb.小森 豊生(学４)

B.Tb.神野 葵(学４)　　Tb.篠塚 裕太(学４)

E.ボザ／ トロンボーンの為の3つの小品

ウジェーヌ・ボザ（1905年～1991年）はフランス出身の作曲家で、主に室内楽やソロなどの作品で知られるが、交響曲やバレエ、オペラなども手掛けている。

この曲はアレグロ、モデラート、アレグロ - ヴィヴォの3つの楽章からなる。第1曲アレグロは第１トロンボーンからのフーガで始まり、中間部では第３トロンボーンのリタルランドをきっかけに、ずっしりとした旋律回しがあり最後には金属的なサウンドで終わる。第２曲は弱音器を使いつつも、重厚で力強いトロンボーンらしいハーモニーから始まり、甘く繊細なメロディーへと繋がっていき、最後は静かに鐘が鳴るように消えていく。第３曲アレグロ―ヴィヴォはＡＢＡ´の3部形式。第4奏者から始まる短い音符の刻みに、第1奏者が軽く飛び跳ねるような旋律を奏でる。中間部で16分音符など細かいリズムの受け渡しがあり、ユニゾンのアクセントによる引き締まったリズムが特徴的。そしてグリッサンドで駆け下って主部の再現部に戻る。

トロンボーン 4年　小森 豊生

曲目解説指導　那須田 務（講師）

木管五重奏

Hr.佐藤 俊輝(学４)

Ob.宮本 菜摘(学４)　　Fg.平川 眞鈴(学４)

Fl.梅崎 真綾(学４)　　Cl.笠 歌純(学４)

H.トマジ／ 世俗と神聖な5つの踊り

アンリ・トマジ(1901年～1972年)はフランスのマルセイユに生まれたコルシカ系の作曲家。パリ音楽院で学び、1927年にはローマ大賞を受賞。作曲活動の他に1930年から5年間、インドシナ放送の音楽監督もつとめていた。

《世俗と神聖な5つの踊り》はプラハのライヒャ木管五重奏団のために書かれ、様々な踊りを題材にした5つの楽章で構成されている。第1楽章「田舎の踊り」(Danse agreste)は、ファゴットから勢いよく始まり、クラリネットとオーボエのカデンツァで展開していく。第2楽章「世俗的な踊り」(Danse profane)はホルン・ソロと他の木管楽器の細かなリズムによる不安定な気質の楽章。第3楽章「神聖な祈りの踊り」(Danse sacrée)は変ホ長調。ファゴット・ソロが心地良く、今までの荒々しい楽章と対比される。第4楽章「婚礼の踊り」(Danse nuptiale)には、楽譜に「スケルツァンド」と表示され、フルートの12連符など遊び心溢れる冒頭と、叙情的なフレーズが交互に現れる。第5楽章「戦士の踊り」(Danse guerrière)は、ファゴットの高音域のソロが、聴く人に切迫感を与え、4分の4拍子から8分の7拍子へ交互に変わるなど、衝動的に進行していく。

ファゴット 4年　平川 眞鈴

曲目解説指導　那須田 務（講師）

ピアノ四重奏

Pf.西村 ゆき乃(学３)　　Va.宮島 麻歩(学３)

Vn.小林 真子(学３)　　Vc.大友 美侑(卒)

G.フォーレ／ ピアノ四重奏 第1番 Op.15

1845年にフランス南部のパミエに生まれたフォーレ(1845年～1924年)は、父親が学長を務める学校のチャペル(礼拝堂)で、ハーモニウムを弾いて幼少期を過ごした。これにより彼の音楽的才能が見出され、9歳で古典宗教音楽学校に入学し、サン＝サーンスに指導を受けることになる。同校で多数の賞を受けて卒業後、マドレーヌ教会のオルガニストやパリ音楽院の学長となったフォーレが1879年に完成させたのが、この≪ピアノ四重奏曲第1番≫である。明確な調性を用いた旋律とリズム感が特徴なフォーレの初期の代表作である。

第一楽章はハ短調、ソナタ形式。弦楽器のまっすぐ堂々とした第一主題と穏やかな音のさざなみを思わせる第二主題があらわれる。第二楽章は変ホ長調、ロンド形式。弦楽器のピッチカートとピアノの軽やかな旋律から始まり、中間部では抒情的な旋律を奏でる。第三楽章はハ短調、三部形式。悲しみに溢れた緩徐楽章であり、失恋の思いを表現しているのではと評する者もいる。第四楽章はハ短調、ソナタ形式。力強いエネルギーに溢れており、それぞれの旋律の重なり方が打ち寄せる波を思わせる。

ヴァイオリン 3年　小林 真子　　ピアノ 3年　西村 ゆき乃

曲目解説指導　那須田 務（講師）